

特集 二〇〇九年度立教大学文学部史学科主催公開講演会

島津氏の琉球出兵四〇〇〇年に考える ―その実相と言説―

(二〇〇九年六月二十七日、立教大学池袋キャンパス五号館で開催)

司会(小野沢あかね) 本日は、たいへん暑いなか、立教大学までお越しいただきまして、本当にありがとうございます。私は今日の司会を務めさせていただきます、本学で日本近代史を担当しております、小野沢と申します。どうぞよろしく願います。

最初に配布資料の確認をさせていただきますと思いますけれども、本日はまず、『立教大学史学会公開講演会』と題しております、レジュメをとじた冊子が一冊ございます。それから、新聞資料『琉球新報』の関連記事を綴りました資料が一部、そして個別の資料が一つお配りされているかと思っております、ご確認いただければと思います。

最初に、簡単に本日のタイムテーブルの概要をご説明してから本題に入りたいと思います。公開講演会は、立教大学文学部史学科と立教大学史学会の主催でございます、共催が日本学研究所になっておりますので、まず本学の史

学科科長の弘末雅士のほうから開会のあいさつをいただきまして、その後、趣旨説明を経まして、メインの報告者のお三方に、それぞれ五〇分ずつほどご報告をいただくこととなります。

そのあと、軽い質疑、事実確認の質疑を五分ないし一〇分取りましたあと、一六時四〇分ごろ休憩に入らせていただいて、その後、全体討論でコメントをいただいたあと、フロアからのご発言等をいただきたいと思っております。最後が、だいたい一八時四〇分か五〇分ぐらいをめどにと思っております、非常に長丁場の公開講演会となりますけれども、どうぞ最後まで、ぜひお付き合いいただければ幸いです。

それでは、最初に本学の史学科科長の弘末先生のほうからあいさつをいただきたいと思っております。弘末先生、よろしく願います。

## 開会あいさつ

ご紹介を賜りました、弘末でございます。本日はお暑いなか、たくさんの方々にお集まりいただきまして、心より御礼申し上げます。主催者の一端であります、立教大学文学部史学科を代表いたしました、ひとこと、ごあいさつさせていただきます。

私ども史学科は、日本史学専修、世界史学専修、超域化学専修という三つの専修からなっております。ただし、この三つの垣根は、決してそんなに高いものではなく、相互に討論をし合い、また、テーマとなる問題について語り合い、私自身は世界史学のアジア海洋世界を専門としておりますが、日本史学専修の先生方も、常に日本というものを周辺のアジア、あるいは広く世界というものとの関係のなかで考えて、研究をされております。

本日、趣旨説明をこれからされます荒野先生、ならびに、先ほどから司会を担当していただいております小野沢先生も、日本とあるいは沖繩というものを東アジアや、周辺世界との関係のなかで研究していくという方法論をお持ちの方々でございます。

こうした先生方の活動に支えられまして、本日は『島津氏の琉球出兵四〇〇年に考える―その実相と言説―』という公開講演会を持つことができました。四〇〇年というのは、な

なか長い、江戸時代の近世初めから四〇〇年ということになります。その近世を、いま現在、どうとらえるのか。東アジアの国民国家の枠組みというものが、かなり窮屈になりかけているこの時代に、沖繩という問題をどのように考えるのか。のちほど諸先生方からもあるかと思えますけれども、単に四〇〇年前の問題だけではなくて、現在の問題までも含めて考えてみようというのが、本日の公開講演会の目的でございます。どうぞ、暑いなかでございますけれども、活発なるご議論のほどをお願い申しあげまして、私のあいさつとさせていただきます。よろしくお願いいたします。

**司会** それでは早速、趣旨説明のほうにまいりたいと思えます。荒野泰典先生、よろしくお願いたします。

## 趣旨説明

**荒野** 立教大学の荒野でございます。一応、この公開講演会の企画者の一人として、なぜ、こういう企画を立てたのかということについて、簡単に説明をさせていただきます。

いつも長くなるので短くいけということですので、三分ぐらいで趣旨説明のほうをさせていただきます。プログラムのところ、最初の部分で私のお話したいことは文

章化してありますので、それにのっとって、簡単に、これをかいつまんだようなかたちでお話しをさせていただきます。

まず先ほど、午前中から、実は史学会の総会というものがありまして、冷房のよく効いた部屋にいたので外の暑さがわからなかったのですけれど、外に、この公開講演会の打ち合わせで昼食に行きましたら、暑いなのつて。この暑さのなか、わざわざお足をお運びいただきまして、ありがとうございます。

なぜ、いま、島津氏の琉球出兵なのかということでありますけれども、この公開講演会、こういうかたちのシンポジウムか講演会を開きたいと、二〇〇九年が近づく数年前から考えておりまして、ようやく、こういうかたちで実現できたことは、とてもうれしく思っております。ご協力いただいた、講演者のみなさん、あるいはコメンテーター、フロア発言を準備していただいているみなさんには、心からお礼を申しあげたいと思います。

四〇〇年ということですが、どうも本土では、この事件、このできごとについて、非常に心が低いと思わざるをえないですね。ちょうど、今年が横浜開港一五〇年ということになりますけれども、それは首都圏に住んでいるからかもしれません、しきりに報道などがされるわけです。イベントがある度にニュースで取り上げられるわけ

ですが、このこと、島津氏の琉球出兵、あるいは琉球侵攻について取り上げるニュースには、ほとんど接することがないということがあります。

実際、現代のわれわれの生活というものを考えてみるときに、例えば、端的に言って、米軍施設の七〇数パーセントが沖縄に集中している、ということは、私たちの日常の平和、安全は、沖縄県民の犠牲のうえに成り立っていると言えるわけです。四〇〇年前に日本列島の南端で起きたこの事件は、単なる一地方の戦国大名の軍事行動と見ることもできないではありませんが、このような沖縄の現代の在り方のスタートと言っても過言ではないと私は思うのです。四〇〇年前のこのできごととは、決して現在の私たちの日常生活と無縁ではないはずなのですけれども、そのあたりの認識が、どうも本土のほうではあまり浸透していないのではないかと私は思っています。

それに対して、沖縄では非常に、もちろん沖縄県民の運命に直接関わることだということもありまして、非常に心があり、本土との温度差はかなり大きい。それは、直接にはそれぞれが置かれている現状やそのものとなっている歴史的経緯の違い、そのことにもとづく歴史認識の内容や質の違いによります。その深い溝を何とかしたい、この公開講演会が、その一助になればという思いから企画したというのが、まず第一であります。

第二の点は、昔からというか、以前から疑問に思っていた戦争そのものの経緯です。島津軍の侵攻に対して、琉球側は徹底抗戦することもなかったし、また、明国への救援要請などもおこなわなかったと、よく言われることがありますが。そのことについての歴史的評価が、まだ、きちんとされていないのではないかと私は以前から考えておりました。そのあたりの経緯を、なぜそうだったのかということについて、できるだけ掘り下げて考える素材を与えていただきたいというのが、第二の目的であります。

なぜ、そのようなことを考えるかということについては、この趣旨説明の文章のなかで、ちよつと詳しく書かせていただいておりますので、それをご覧いただければと思います。

三つ目は、この事件を、本土では、あるいは当時の、近世の日本では、どのように語り継がれてきた歴史なのか。沖縄では、どうなのか。それが現代の私たちの歴史認識、内容、あるいは質を規定していると考え、両者はどうであるかということ併せて考えたいと。そのための素材を与えていただければありがたいということ。これは三つ目の根本的な関心であります。以上の関心から、こういう企画を立てたわけであります。

最後にひとこと、なぜ琉球「出兵」なのかということについて、簡単に説明をさせていただきます。普段、私どもは琉

球侵攻とか、侵略とか、征服とか、そういう言葉を使うのですけれど、この講演会のテーマ名を考えるとときに、ふと、沖縄の人たちは、これをどのように見ておられるか、思っておられるのだろうかというのが気になりまして、山川出版社の県史シリーズ『沖縄県史』というものを見ましたら、「琉球出兵」と書いてありました。現地の方々が、こういう言葉遣いで、この事件を表現しておられるということを取りあえず尊重いたしました。今回は「琉球出兵」とさせていただきます。

以上が趣旨説明であります。どうぞよろしく願います。

**司会** それでは早速、ご報告のほうに移らせていただきますと思います。一つ申し遅れましたが、お手元に小さい、B五の半分ぐらいの紙が配布されているかと思いますが、それは、もし報告に關しましてご質問等がございましたら、そこに書いていただきましたら、休憩時間の際に司会のほうまで持ってきていただけましたら、報告者の方に、それをお見せして、お答えいただきたいと考えておりますので、よろしく願います。

それでは早速、上原兼善先生から「島津氏の琉球侵略—その原因・経緯・影響—」というタイトルでご報告をお願いしたいと思います。どうぞよろしく願います。